

令和4年3月3日(木) 14:00～16:30
「地域の支え合いフォーラム2021」を開催しました。



奈良県コンベンションセンター203会議室を会場に、オンライン（ZOOMウェビナー）とのハイブリッド形式にて実施しました。

今回のねらいは、「もしものとき」に備えて、自分の大切にしていることや、どこでどのような医療やケアを望んでいるか等について信頼する人たちと共有するための「人生会議」について、その必要性や役割について理解を深めるというもので、医師会とも共催で行いました。

会場参加者は61名（スタッフ含む）、オンラインは88アカウントのログインがあり、地区社協役員や一般市民をはじめ、福祉関係者、医療関係者、司法関係者など幅広い属性の参加がありました。

→ 奈良市長あいさつ



→ 医師会長あいさつ



→ 総合司会は、奈良市在宅医療・介護連携支援センターの佐藤さん



前半の【講演Ⅰ・Ⅱ】では、ACP（通称：人生会議）について、実践事例を通じて専門的な立場から奈良での取り組みの現状について紹介いただき、その中で感じているACPの意義や必要性、課題などにも言及していただきながら、ACPについての理解促進を図っていきました。

まず【講演Ⅰ】では、医師の立場から訪問診療の実践報告をいただき、併せて「ACPとは何か」について基本的な概要の説明をしていただきました。

次に【講演Ⅱ】では、弁護士の立場からACPの法的な位置づけについてご説明いただき、併せて成年後見制度における専門職後見人としての実践報告をいただきました。



【講演Ⅰ】

「これからの人生を考える ～在宅という選択肢～」

医師 山崎 政直 氏

（奈良市在宅医療・介護連携支援センター長）

【講演Ⅱ】

「自分が望む医療やケアを受けるとのこと

～身寄りがない人の支援を考える～」

弁護士 佐々木 育子 氏

（奈良弁護士会）

後半の【討論会】では、「人生会議」について学んだ参加者が、それぞれの立場（家族、地域活動者、専門職）で何ができるのか、また、人生会議についてもっと理解を深めたり、普及や啓発を進めるには何が大切かなどについて話し合いました。

討論会では、奈良市生活支援コーディネーターの北野がファシリテーターとなり、前半でご講演いただいた山崎医師、佐々木弁護士に加え、奈良市地区社会福祉協議会会長会の代表の立場として、またご自身でも看取りを経験された当事者家族の立場として、今西会長にもご登壇いただきました。

まずは今西会長から、ご自身が実母の看取りをされた時のエピソードをお話いただいたのち、各方面から事前にいただいた疑問・質問について投げかけ、それぞれの立場からコメントしていただくという質疑応答のような形式で進めていきました。

フォーラム全体を通して、一番のメッセージは「元気なうちから話し合う」ということ。そしてもう一つ、人生会議はもしもの時の自分自身の暮らし方を伝えるためというのと同時に「残された家族や周囲の人を困らせない、できるだけ後悔させないためでもある」ということでした。人とのつながりは死後にも大きく影響するというのを改めて感じるようになりました。

奈良市だけでなく全国的にも「人生会議」をどう普及・啓発を進めるのかというのは課題も山積です。そんな中でも、令和3年4月に奈良市が発行した「わたしの未来ノート」は、人生会議のきっかけづくりになればとの思いで作成されました。このノートを手に取り書き込んでみるなど、まずは一歩ずつ何かできることを探していければと思います。



【討論会】

「元気なうちから『話し合い』と『つながり』づくり
～信頼できる人探し～」

登壇者 山崎 政直 氏 (医師)
佐々木 育子 氏 (弁護士)
今西 康乃 氏
(奈良市地区社会福祉協議会会長会会長)

コーディネーター 北野 直紀
(奈良市生活支援コーディネーター)

「今回の講演Ⅰ、Ⅱ、討論会を聞いて、印象に残ったキーワードは何ですか？」 (参加者アンケートより抜粋)

- ・ 人生会議は決めるのではなくたくさん話をすることが大切だという事。
- ・ 自分のため、家族のため、大切な人のためにまずは話し合う機会をもつ、何度も話合っていくこと
- ・ 元気なうちから家族等と話し合い、つながること。自分の想いを伝えること
- ・ 自分で意思決定出来ない時が必ず来る
- ・ 共同意思決定支援、人とのつながり、しあわせな人生の閉じ方、成年後見制度及び任意後見
- ・ わたしの未来ノートを活用し、家族（子供）に相談しておきたい。
- ・ 自分のことを振り返るきっかけになる。どこにでも置けるノート。
 - ・ 後悔しない看取りはない。大切な人と話しを沢山することが大切。
 - ・ 山崎先生の「どのように準備をしたとしても看取った後には後悔はある。一つでも送る人の希望どうりにできたらと考える。」というお言葉が夫を送って13年になる今、心に浸みました。
 - ・ 寄り添うこと、その人の思いを尊重することが残された人にとっても生きていく糧になる（支援者が良いと思うゴールの形がベストとは限らない）。

